

日本軍性奴隷制の映画月間——あちこちで記憶をつないでいきたい

梶村道子(ベルリン・女の会)

この11月、ベルリンでは日本軍性奴隷制のサバイバーに焦点を当てた映画月間を催しています。企画の動機は日韓「合意」です。アジア全域の女性に犠牲を強いた日本軍の組織的性暴力を日本と韓国の外交案件に矮小化されてはたまらない、ならば映画を通して加害と被害の広がり多様性をもっと知ってもらおうではないか——。ベルリン女の会も関わる「慰安婦」ワーキング・グループが1年前から準備してきました。

一人ひとりを心に刻む映画を

釜学順カマノノリさんの名乗り出から四半世紀余り、多くの映像記録が生まれています。韓国の作品が多数を占めるのは、韓国社会の関心と支援運動の強さから当然ですが、その中には韓国、中国、フィリピンなどの被害者に等しくライトを当て、日本軍性奴隷制の全貌を概観する、説得力ある映画もあります。しかし地域と時期により形態も被害の様相も違う日本軍の性暴力を、その属する社会によって異なる女性たちの戦後や名乗り出の状況や周囲の対応、すなわち個人にまつわる多様な事実を一括りにはしたくないと私たちは考えました。wamの入り口で訪問者は女性たちのポートレートに感銘を受けます。ドイツでいうならば、たとえば首都ベルリンのホロコースト記念碑の地下にあるインフォ・センターで流される、サバイバーの語りと映像、あるいは舗道に埋め込まれた「つまず躓きの石」でしょう。「躓きの石」は、そこに刻まれた名前をネットで辿れば個人史に出会えます。一人ひとりの



ナナムの家の成り立ちを語る矢嶋幸さん (撮影:筆者)

の顔や生き様を観る人の心に刻んで記憶してもらおう、これはドイツの「想起する文化」の重要な表現手法の一つです。ならばサバイバー一人ひとりの歴史を伝えたい、と私たちも思ったのです。

選んだ6本の映画

今回選んだのは、被害地域毎に被害女性の姿を克明に追った6本です。初回は

このテーマの古典「ナナムの家」シリーズの第2作。ナナムの家の成り立ちを知らない若い韓国系の観客が多く、製作時から長い時間が経ったことをあらためて実感させられた一方で、問題は未解決のままです。第2回は、中国の山西省で日本軍の凄まじい性暴力を受けた被害者を追った映画「太陽が欲しい」の英語版です。被害を心身に刻んだ女性たちの言葉と元兵士の加害の証言が2時間にも及ぶ重い映画ですが、最後まで観客を惹きつけました。元兵士による証言が例外かどうか、この問題は中国でどう受け止められているのかに関心が示されたのが、ドイツらしいところ。女性たちの置かれた状況が20年前とほぼ変わっていないことに衝撃を受けたという人もいました。

映画月間は、フィリピンのリラ・ピリピーナのロラたち取材した“Forgotten Sex Slaves—Comfort Women in the Philippines”、インドネシアがテーマの“The Story of Papak Building”と“Because We were Beautiful”、台湾の「葦の歌」と続きます。フィリピンの映像はドイツ人監督の作品です。ロラたちの被害と闘いが今後ドイツで知られていくことが期待されます。“The Story of Papak Building”では、スリ・スカンティさんが若い世代の支援者に伴われ、初めて被害の現場に戻ります。

“Because We were Beautiful”で、戦争中日本で大ヒットしたという「愛国の花」をサバイバーの一人が歌う最後の場面は、日本人には特に衝撃的です。上映日には作品中で聞き取りをしているヒルデ・ヤンセンさんをゲストに迎えます。最終回の「葦の歌」では、「阿嬾アハの家—平和と女性の人権博物館」の康淑華さんに、いかにしてサバイバーの心の傷を癒す手助けができたかを話していただきます。この実践は、今も止まない戦時性暴力の被害者支援の方法として、もっと知られてよいものです。

10年前のアメリカやカナダやEUの「慰安婦」決議に明らかかなように、日本軍性奴隷制の事実は、すでに世界で共有されている記憶です。その記憶を、ユネスコ世界の記憶に登録させまいとする「記憶の抹殺者」安倍政権に対抗できる手段は多くあります。可能な場所で、使える資料を駆使してこの記憶を広めていきたいものです。それを受け止め、継承してくれる人たちは、どこにも必ずいるでしょうから。



「太陽が欲しい」の上映後、質問に答える班忠義監督(正面中央)。初回、第2回ともに、フンボルト大学の78席の講義室は若い観客で満席。上映後も多くの人が残って議論に参加した。(撮影:筆者)